

## 〈原著論文〉

# ICT 利用による「想像の共同体」への参加を 目指したオンライン授業

杉 浦 健\*

## Online lessons aimed at participating in the "imaginary community" using ICT

(SUGIURA Takeshi)

### 1. はじめに

2020年度、2021年度、新型コロナウイルス感染症の蔓延のために、対面授業がなくなり、ほぼすべてがオンライン授業となった。晴天の霹靂で全くの白紙状態から、Zoom や Google Classroom、Google Forms などの ICT を利用して授業を準備、運営、開講してきた。

その中で、もちろんさまざまな問題が起こったと同時に、見切り発車であったからこそできたことやさまざまな発見、使えること・ものが見えてきた。またさまざまな制約があるオンライン授業をすることによって、オンライン授業に限らない、そもそも授業において大切なことが見えてきた。

本論文では、にわかにはじまったオンライン授業を振り返り、これからの方向性、——それはこれからのオンライン授業の方向性であると同時に、これからの対面授業も含めた授業の方向性でもある——を明らかにしていきたい。

ここでは、主として筆者が担当した学習心理学、教育課程・方法論 B のオンライン授業について言及していく。これらの科目は教職課程の「教育の基礎的理解に関する科目」および「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」に属する選択必修科目である。どちらの授業も教職課程の学生たちに教育や学習、授業について教え、考えさせる講義であるため、オンライン授業そのものの意味についても学生たちに考える機会を提供し、教えてきた。そのようにオンライン授業を作り、教えていく過程で、筆者自身も気づかされたことも多くあった。それらの気づき、発見についても明らかにしていきたい。

---

\* 近畿大学教職教育部教授

〔キーワード〕 想像の共同体、社会構築主義、Zoom、Google Forms

## 2. オンライン授業がはじまる前

当初、オンラインでの授業実施が決定した際には、オンデマンドでのプログラムも検討した。いわばにわか You Tuber である。実際に授業の一場面を携帯電話のビデオ録画で撮影したり、パワーポイントのスライド録画機能を使って、短い授業を作成したりもしてみた。確かに一度授業を作ってしまうと、何回でも使いまわしが可能になるし、学生もわからなければ何回も視聴し直すことによって、知識の定着も可能になると考えられた。

しかしながら、慣れていないこともあって、30分の授業を作るのにその何倍もの手間がかかること、普段の対面授業において、たとえそれが単純な説明であっても学生とやり取りをしながら授業を進めていたため、一人でひたすら説明するような授業が授業をする側にとって苦痛であり、かつこれでは学生にうまく知識を身に付けさせることもできないと考えられた。また授業自体が単に知識を身に付けさせるようなものではなく、教員と学生とのやり取りの中で「教育とは何か」や「授業とはどのようなものなのか」などを考えさせていくものであったことから、オンデマンドでのプログラムは断念せざるを得ず、結局試用して使えそうな手ごたえを得ていた Zoom を利用したリアルタイム授業とすることとした。

## 3. Zoom によるオンライン授業の開始

すでに利用したことのある人が多いと思われるが、Zoom はオンラインのビデオ会議システムである。無料版では1回に40分の時間制限があったが、筆者の所属する近畿大学では、大学で契約をしているため、無制限に使用することができた。

使い方としては、まず教員がミーティングをスケジュールリングする。例えば4月10日の2時間目の授業だとすると、授業開始前の10時30分から（授業開始は10時45分）終了時刻を少し過ぎた12時30分をスケジュールリングすると、ミーティング ID とパスコード、招待用の URL のアドレスが作成されるので、それをコピーして学生に送付する。筆者は後述するように Google の Classroom のストリームを通じて学生に伝えていた。学生は授業時間になったら URL アドレスをクリックするか、Zoom を起動してからミーティング ID とパスコードを入力して授業に参加していた。

Zoom の URL の送付や資料送付、レポート提出など、履修学生とのやり取りは、Google の Classroom を使用した。まず授業ごとの Classroom を作成する。各 Classroom にはそのクラスを表すクラスコードが自動作成されるため、履修登録を済ませた学生に対して、

Classroom のクラスコードを知らせ、その Classroom への登録を行わせている。

なお、近畿大学では、履修登録自体には UNIVERSAL PASSPORT（通称 UNIPA、以下も UNIPA と表示）を使用している。UNIPA の仕組みでも学生とのやり取りが可能なのであるが、学生が授業開始時に一斉にアクセスすることで、回線がパンクする恐れがあるため、履修登録を行った学生に対しては、UNIPA を通して Classroom のクラスコードを知らせたのちは、その授業の Classroom でやり取りを行うようになっている。

#### 4. Zoom の利点、弱点

Zoom による授業の弱点としては、近畿大学では、プライバシー保護のため、基本的にはビデオオフで授業を行っている。そのため教員には、学生が果たしてその場にいるのかどうかを確かめるすべがない。信じて授業を行うしかないのが実情である。

電波状態が悪いとよく切断されるため、Zoom から学生がしばしばいなくなる。単に抜けているのか、電波状態が悪くて抜けているのか、こちらでは判断しようがない。

また Zoom による授業に列車などの移動中に参加している者もいた。対面授業と併用になった2021年度には、遠方から大学に通っている者などはその移動中に授業を受けるという者もいた。筆者の授業ではないが、授業で学生に意見を求めた際に電車の中のため、発言できないとの返事を受けた教員がいたこともあり、後に教職課程の授業では、移動中は授業受講を避け、録画で見るように指示をした。

また授業中に自分の考えを記述するなどの課題を行かせたときに、その進行度合いを見ることができないことも Zoom による授業の弱点である。進行度合いだけからいえば、後述のチャットで課題が終わった者に報告をさせ、例えば半分程が終わった時点で先に進むといったやり方を取ることができるが、課題に対してどのくらい記述できているのか、課題は難しすぎないか、考えるヒントを出す必要はないかなど、対面授業であれば机間巡視である程度モニターできることが、オンライン授業ではリアルタイムで知ることができない。小さな問題点ではあるが、このことも含めて、オンライン授業では学生の反応、課題の進行具合、わかっていなさそうな顔色、集中力が切れた雰囲気などをリアルタイムでモニターできないことが授業を進めていくにあたって、大きなマイナスになっている（モニターできないため、マイナスが感じられない形だが、実際にはマイナスになっている）と思われる。

Zoom による授業の利点としては、チャット機能がある。授業中に意見を聞いたり、発問に

答えてもらったりするときに使用している。対面授業で一人に意見を言ってもらおうとどうしてもそれだけで時間がたってしまうが、チャットを使うと複数名の意見を短時間で得ることができるため、かなり役に立った機能であった。ただし、小さなスペースでの記載のため、多くの意見が出てくると、表示が流れていってしまうため、みなの意見を一覧にして比較するなどはやりにくい。今後、意見を付箋のような形で投稿して、みなで共有できる、ロイロノートのようなアプリも並行して使うことを検討している。

Zoom でもう一つ便利なのが録画機能である。2021年度後期には、対面授業も専門課程を中心にはじまり、リアルタイムでの授業を受けることのできない学生が増えたため、授業を録画して、その記録を Google Classroom にアップし、後日視聴して、後述の感想 Forms を書いて提出することで出席扱いとするようにしていた。形としてはオンデマンドプログラムとなるが、授業自体はリアルタイムで学生とのやり取りを行いながら説明をしているため、録画を見た学生も授業に参加している感があるのではないかと思われる。イメージとしては、ラジオを収録して再放送しているものに近いのではないかと感じている。

## 5. Zoom のブレイクアウトセッションによるグループ活動

教育課程・方法論 B の授業では、ブレイクアウトセッションを使ってグループ活動（ロールプレイ）を行っている。ブレイクアウトセッションは、Zoom の機能であり、人数やメンバーを指定して、別の会議室（ルーム）に分かれてそれぞれグループ活動ができるものである。ロールプレイのグループ活動では、10名ほどのグループを作り、ホームルームを受け持つ担任という役割を与え、順番に教師役になり、残りを生徒役として、初めてのロングホームルームでの自己紹介や、勉強する理由、受験生へのはげましなどを演じるものである。

このグループ活動については、履修人数が少ない授業の場合（おおよそ15名程度）、ブレイクアウトセッションを行わずに順番にロールプレイを行うことができた。しかしながらそれ以上の人数の授業になると、時間の関係で、ブレイクアウトセッションでグループにわかれざるを得なかった。もちろんオンライン授業でもグループ活動ができることは Zoom のブレイクアウトセッションの優れている点ではある。しかしながら、基本的に教員は同時にすべてのブレイクアウトセッションを見ることができないため、それぞれのグループ活動がうまくいくかどうかは各グループに任さざるを得ない。対面授業であればすべてのグループ活動に付くことはできなくとも、遠目でその雰囲気を感じることができるのだが、ブレイクアウトセッション

ンではそれが難しく、歯がゆい思いがあった。考え方を変えれば、教員がコントロールしない分、学生同士で何とかしなければいけないという自立性は養えたかもしれない。

## 6. Google Forms を利用した授業感想の提出とフィードバック

授業で重要な役割を果たしたもう一つが Google の Forms である。これはテストやアンケートを自由に作成できるアプリで、授業では感想や記述課題の提出に使用した。使い方はシンプルで、Forms で名前と感想の項目、時には追加の課題の項目を作成し、その URL を Classroom にアップし、学生はその URL にアクセスし、授業中や授業終了後に記述、そのまま提出するというものである。

提出された Forms 内容は、簡単にテキストデータにすることができるため、「感想フィードバック」として一つのファイルにまとめ（名前は示さないため、感想の記述のみになる）、簡単なコメントを付けて翌回の資料としてフィードバックを行っている。具体的には授業の前半部分で復習を兼ねて簡単なコメントを口頭で行ってから、その回の授業を開始している。

授業感想はそれを読むだけで前回何が行われたのか、大事な内容は何かをかなりの部分理解、復習することができる。また感想を書くことで授業の内容を自分になりまとめる作業になっており、それを次の回に振り返ることで、授業内容の定着にもつながっていると思われる。最終授業における授業全体を通した感想でも、この感想フィードバックの評判がかなり高かった。

ちなみにこれまで対面授業でも感想フィードバックは行っていた。具体的にはかつて出席を記録するのに使っていた出席カードという10cm弱の用紙の裏が白紙になっているため、そちらに感想を書かせ、それらを並べてコピーし、手書きでコメントを付けてプリントにしてフィードバックを行っていた。1クラス分のフィードバックプリントを作るのに1時間以上かかっていたので、それに比べると大きな労力削減（おおよそ手間としては半分程度であろう）になった。今後対面授業が始まった際にも、そのままこの Google Forms を使って感想を提出してもらう予定である。

## 7. オンライン授業で大事にしたこと ―想像の共同体への参加を目指して―

にわかにはじまったオンライン授業において筆者が重要な原則としたのは、オンデマンド授業にしなかった理由でもあるのだが、授業を単なる知識の伝達、知識の獲得のために行うので

はなく、知識の共有による〈想像の共同体〉（藤田，1996）への参加を目指したということである。

知識の共有が〈想像の共同体〉への参加の意味を持つという考え方は、社会的構築主義（社会構築主義とも言われる）に基づいている。社会的構築主義とは、世界が言葉の相互使用によって社会的に形作られているという考え方である（例えば，Burr，1995）。社会的構築主義の考え方では、我々が認識している現実や現実を説明する概念は、客観的に存在するものではなく、言葉を使って共通理解することではじめて概念として成立すると考える。例えば、「雷」という科学的な現象であっても、私たちが自然界に起こる電氣的な放電現象を「雷」という言葉で共通理解し、「雷」という言葉を使ってその現象についてコミュニケーションすることで現実となり、知識となる。文化によって虹の色の数が異なるのも、それぞれの文化という〈想像の共同体〉によって共有される虹の色という概念が異なるからである。

社会的構築主義の、知識や私たちが当たり前と思っている現実すらも、その考え方が文化や社会の中で共有されることで作り上げられるという考え方を前提とすると、その文化で共有されている知識を持っていない者は、その文化という〈想像の共同体〉に参加をしていないという意味も持つこととなる。

例えば、冗談のようなたとえだが、机のことを「きやりーぽにょぽにょ」と言い張る男がいたとしよう。みなが机のことを机と認識している中で、この男一人がそれを理解できず、「きやりーぽにょぽにょ」と主張している。みなは変わり者だとして男に近づこうとしない。机が机であるという知識を共有していない男は、机が机であるという知識を共有している人々、〈想像の共同体〉から仲間外れになるのである。

そんな男に親切な人々がいろいろ教えてくれる。「それは『きやりーぽにょぽにょ』ではないよ、みなに聞いてごらん、みな机と答えるから」、「机は昔、神様にお供えをする台が机（き）と言われていたのが文章を書くための台『文机』に流用されたのだよ」、「『つくえ』というのは、机は台があって足が4本、まるで枝が突き出ているようにあるから、もともと『突き枝（つきえ）』と言われていたのが、だんだんまって『つくえ』になったのだよ」など、男は机に関するさまざまなことを教えてもらうことで学び、次第に理解するようになっていく。

そしてある時、男は完全に理解する。「いままで自分はこれを『きやりーぽにょぽにょ』だと思っていたけれど、やっと理解したよ。これは『机』だ」と。

周りの人々は、口々にこう男に伝える。「やっと理解したね。これで君も私たちの仲間だ」。

以上、冗談のような例ではあるが、知識を身に付ける（理解する）ということがその知識を共有する文化に参加をすることであるということが分かるのではないだろうか。ちなみにこう考えると、教えるとはその知識を共有する共同体へ仲間入りを誘うという意味も持つことが分かるだろう。

もちろん学校での勉強や大学での講義で身に付ける知識も基本的に同じ意味を持っている。知識を身に付けるとは、単に自分の中に知識を蓄積するという意味を持つだけでなく、その知識を共有する〈想像の共同体〉への参加をも意味するのである。

ちなみになぜ〈想像の共同体〉なのかといえば、その共同体には明確な境界があるわけではないからであり、また意識せず学んでいる際には、学ぶこと、知識を身に付けることが〈想像の共同体〉への参加を意味するとは感じられないからである。

## 8. 知識の共有を意識したオンライン授業

対面授業がまかりなりに、学生たちが一つの教室に集まって共に学ぶ環境にあるのに対して、オンライン授業では、それぞれ空間的に分断された形で授業を受講することになる。確かにオンデマンド授業にしまえば、何度も視聴することができ、より確実な知識の定着ができるかもしれない。しかしながら、そうしてしまうと、知識は身に付けたはいいものの、その学びを誰とも共有することなく、ただでさえ希薄な学ぶことの〈想像の共同体〉への参加という意味が薄れてしまうのではないかと思われた。対面しない、集まらないオンライン授業だからこそ、知識の共有と体験の共有が重要となる。同じ授業に参加して、経験を共有し、知識を共有し、互いの考えを交換し、共有する。それがより授業への参加意識を高めると同時に、授業で学ぶことの意味、特に学ぶことが内在する社会的な意味をより強く感じさせる働きがあると考え、授業を組み立て、またそのようなメッセージを授業内で事あるごとに伝えてきた。それが狙い通りオンライン授業でできたかどうかは別にして、そのような学びを目指して授業を行ってきた。

## 9. 参加型の授業を心がけて

学習心理学は講義式の授業ではあるが、単に理論を説明するだけでなく、説明を行う際にはできるだけ学生も参加しながら内容を理解できるように心がけた。例えば、部分強化効果（報



酬を与える頻度によって、学習の失われやすさが異なる現象）の説明では、文通している2組のカップルがおり、片方のカップルは男の子がラブレターを出すと女の子が毎回返事を書いてくれるのに対して、もう片方のカップルは男の子がラブレターを出しても女の子はだいたい2回に1回の割合でしか返事を書いてくれない、そんな男の子たちが振られてしまい、ラブレターが帰ってこなくなったとき、どちらの男の子が振られたと思えずにラブレターを出し続けるだろうか、と問いかけ、チャットで答えさせたりしている。また強化随伴性の学習理論（報酬（強化子）の伴った行動が強化され、学習される現象）を教える際には、野球部の子とやり取りをしてバッティングフォームの矯正を例に説明をしたりしている。どちらも説明を印象深く、よりわかりやすくするための働きかけでもあるが、それ以上に授業に参加している、同じ体験をしているということを意識して働きかけている。

教育課程・方法論Bでは、すでに述べたように教師役を演じるロールプレイを行っている。その第一義の目的は、もちろん教員として人前で話すスキル、自分の考えを説得力のあるかたちで伝える技術などを鍛えるためではあるのだが、それに加えて、自分が大切に思っている考え（例えば教員になったら子どもたちに一番伝えたいこと）を伝えることで、お互いを承認し合ってほしいという目的がある。ロールプレイという形態が効果的なのは、なかなか関係の薄い学生同士で自分の本音を伝えることは難しいが、演じるというワンクッションを置くことで、むしろ自分の本音を出しやすいということである。

もちろん、まだ自分の考えがまとまっていない場合は、なかなか本音を聞いてもらえたというようにはならないのであるが、聞き手がいることで何とか自分の思いを伝えようとする事自体が、人とつながり、自分を認めてもらえたという感覚につながるのではないかとと思われる。

中原（2022）は、オンライン授業によって、「共にいる、共に学んでいるということが見えにくくなっている。そこは少しでも補完する努力が必要ではないだろうか」と主張している。彼は、「いま、学びはどんどん個人化していて『個別最適』という言葉がはやっている。AIを使って、その子に合わせて学びをカスタマイズして最適なものを組んでいく、そういうことが要請されている。最適化は同時に分断でもあって、共に学ぶという体験は少しずつ失われている。」と指摘し、「共にいる」という感覚は、ぜひ持った方がいいと述べている。筆者も強く同意したい。これからオンライン授業が続こうとも、コロナ感染症が収まり、対面授業が始まったとしても、また個別最適の授業が開発されたとしても、共にいる、共に学ぶという枠組みを



より強く意識して授業を組み立てなければならないと考えている。

## 10. 多様な視点の獲得

Forms による授業感想は、単なる感想だけでなく、自分の経験を振り返って思いついたことやこれまで持っていた疑問などもどんどん書き込むように勧めている。そうすると授業から派生して、多様な考え方が記述され、それが他の学生に対して多様な視点を獲得させる効果を持つことが多い。

例えば、知識の役割について話した授業に関して、ある学生は次のように書いている。

「グローバル化・情報化社会が加速する現代社会では、さらに『知識が価値を持つ社会』とってきます。堺屋太一氏の『知価社会』という本に書かれていたのですが、人間ならではの知識、なにかづく創造性や能力・資質までも資本主義の論理に置き換えられる時代が到来しています。人々の間で共有された知識の中で、どれだけ差別化を図るかが肝要であると考えました」。

筆者は授業を作る際に、授業全体が大きな流れになるようにしている。それによって内容の全体像を把握しやすいと考えるからである。しかしそうすると、流れに合わない内容は省かざるを得ない。だが、先述の学生の感想のような、授業を一つのまとまりとしてわかりやすく示すだけでは教えることがないだろう内容が感想に示されることで、授業の流れから派生して学生は学ぶことができ、その結果、授業全体がより豊かな内容になる。すでに述べたように、オンライン授業が始まるまでは、小さなミニッツペーパーに手書きで提出してもらっていたが、Forms を使うようになってから、感想の量と豊かさが格段に増した。

この Forms による感想課題を行っている学習心理学で筆者は、「この授業ではグループ活動も、話し合いも行わないけれど、『学び合い』の授業だ」と伝えている。その意図は、この授業では講義者からだけしか学べないわけではなく、また心理学の知識を身に付けることで学ぶだけでなく、同じ授業を受けている「学び合う仲間たち」からも学べるのだということを伝えるためである。そしてこれもまた授業が共にあることで成立するものであるということを伝えるためでもあった。

## 11. 知識の定着に関して

学習心理学にしても、教育課程・方法論 B にしても、知識の習得そのものを第一の目的に

した授業ではなかったが、それでも授業で学んだ知識は、学習や教育、授業を考えるにあたって重要なものであり、その理解が必要とされるのは当然である。それではオンライン授業において、知識の習得はどのくらい果たされたのであろうか。

2020年度はまだ録画の仕組みは十分使うことができていなかったが、2021年度になると、対面授業も併用となり、リアルタイム授業が受けられない学生が増えたため、基本的にすべての授業（ブレイクアウトセッションは録画ができないため、ブレイクアウトセッションの授業は除く）を録画して、Classroom から録画を視聴できるようにしていた。そのため、仕組み上は、理解できないところがあれば、何回も授業を再生して受講することができる状態であった。実際に、リアルタイムで十分に理解できなかったところを後に見直すことで理解を進めた熱心な学生もいた。しかしながら、実際のところ学生たちはオンライン授業で非常に忙しく、なかなか録画を見直す余裕がないと思われた。リアルタイムで授業に参加できなかった者たちの中には、明らかに録画をため込み、毎回の感想課題の提出が遅れただろうと思われる者がいた。オンライン授業は、学生が本当に参加しているかどうかを確認することができないため、多くの教員が毎回の授業で課題を課して授業の受講を確認しており、必然的に課題の量が多くなる。知識を定着させるための環境、状況は整えることができたが、実際問題として学生はなかなかしっかりと知識を定着させるまで学ぶ余裕がないのだろう。

知識の定着で役立ったと思われるのがやはり Forms によって提出された感想のフィードバックである。例えば、授業で心理学の理論的な説明をする際に具体例を上げたりするのだが、それに対する感想で自分の経験した別の具体例が示されることによってより理解がしやすくなるのである。例えば、すでに例としてあげた強化随伴性について、授業ではバッシングフォームの矯正で説明したのであるが、それに対してアルバイトで次第に無駄な行動が少なくなることや、数学の問題の解き方が分かるようになるなど、別の具体例が感想で示されることによって、記述した本人もその経験で理論を理解できるだけでなく、感想を読んだ他の者も似たような経験を思い起こして理解できるという利点があったのである。これも Forms による分厚い感想の記述があってこそその利点であろう。

## 12. オンライン授業の経験からこれからの授業に言えること

ここまでにはじめたオンライン授業においての利点や弱点を示してきた。これらのことからわかった、これからの授業において大切にすべきこと—それはオンライン授業であっ

ても、対面授業であっても同じだが—は何であろうか。

まず何よりも重要なことは、授業への参加感、授業で共にある、共に学ぶことの重要性である。場が共有されないオンライン授業では特にこれらの重要性が大きい。しかしながら、振り返ってみた時、はたしてこれまでの対面授業において、生徒に参加感はあったのだろうか。可能性としては場所と時間は共有しているけれども、本当の意味で授業に参加している、共にいる、共に学ぶことができていないということもあったのではないだろうか。たとえ対面授業だったとしてもその状況に甘えず、授業への参加、それは単にさまざまな活動をするという意味だけでなく、身体と思考を働かせて、その時間の中で充実した学びを行うという意味での参加を可能とする授業を作っていかなければならないと考えている。

また Zoom を使ったオンライン授業を行ってわかったのは、インフォーマルな関係の重要性である。Zoom で研究会などを行ってもわかることなのであるが、これまで対面での研究会においては、研究会前後において、その研究会に関連したインフォーマルな雑談から多くの情報や気づきが得られ、そこで学べることが多いのに対して、Zoom での研究会は、参加者同士の横のつながりを作ることが難しいのである。これは授業でも同じで、教員から学ぶことはできても、例えばちょっとわからなかったことを隣の学生に聞くといった関係を作ることができない。ブレイクアウトセッションにしても、授業の中で関係を作ることにはできても、授業を終わってインフォーマルな関係をつなげ、そこで学ぶことは難しい。例えば、「君が紹介してくれたあの言葉、誰の言葉?」「あー、あれは…」などといった話をするのが難しいのである。

オンライン授業を行うことによって、対面授業にはオンライン授業には難しい授業というフォーマルな関係からインフォーマルの関係への橋渡しの役割があり、それが実は学ぶことをより充実させていたことに気づかされた。本論文では、学ぶことが仲間入り、参加であることを強調してきたが、そうであるからこそ、仲間入りをすること、もっと直接的に言えば、友達になることが学ぶことをより充実させるのは必然であろう。授業で結びつフォーマルな関係から、積極的にインフォーマルな関係を促すことは今後、対面授業が始まった際に、より意識して行うべきことであろうと思われた。

### 13. さいごに

本論文では、にわかにはじまったオンライン授業を振り返ることによって、オンライン授業に限らない、授業において大切なことを明らかにしてきた。明らかになったのは、結局、共に

学ぶということが学ぶことの意味、大学という場所の意味であったということであった。今後、オンライン授業が残るのか、対面授業がほとんどになるのか、その方向性は推し量れないが、大学が（それは大きく言えば学校が）共に学ぶ場であり、共に学ぶことが学ぶことの本質的な意味を示すということを常に原則において授業が行われるべきではないかと思われる。

## 引用文献

- 藤田英典 1996 〈想像の共同体〉——学校生活の共生的組み替え 佐伯胖・藤田英典・佐藤学  
編 『学び合う共同体』 東京大学出版会, P.172-182.
- 中原淳 2022「共にいる」感覚が大切 教育新聞 2022年2月21日号
- バー, V. 1997 田中一彦訳 『社会的構築主義への招待——言説分析とは何か』 川島書店  
(Burr, V. 1995 An Introduction to Social Constructionism. Routledge.)